メディア連携を企図する館史としての『東京国立近代美術館60年史』

──「美術館の歴史を一冊の参考図書とする」試み再々論 「企画展出品作家総索引」の編集・刊行・公開を中心に

水谷長志、渡邉美喜、布施 環

1. はじめに──本稿の成り立ちについて

2012年12月1日、東京国立近代美術館（以下、書名等固有名の場合を除き東近美と略記）は開館60周年の記念日を迎えて、この日、シンポジウム「近代美術館の誕生──前史から未来へ」を本館講堂において開催するとともに、『東京国立近代美術館60年史　1952-2012』（以下『60年史』）を刊行した。このシンポジウムおよび『60年史』については、当館ニュース誌『現代の眼』に寄稿があり、また『60年史』における「企画展出品作家総索引」（以下「作家総索引」）については館外誌にも関連記事があり、それら4点を註の1-4に掲げておく[1, 2, 3, 4]。

本稿〈資料紹介〉の対象である『60年史』は、2002年、東近美本館が大規模リニューアルを果たし、本館内にアートライブラリを開設公開した当時から、本館アートライブラリの目標であって、ライブラリをして「美術館の歴史を一冊の参考図書とする」試みの実現形の一つとなるものである。

この試みの初手の表明は、『アート・ドキュメンテーション通信』56号（2003）において、「美術館の歴史を一冊の参考図書とする」[5]として著され、再論が註4の文献（2013）として継承された。

本稿は上記の試みの再々論であり、特に「作家総索引」に焦点を当てて、「作家総索引」自体が、「美術館の歴史を一冊の参考図書」となる可能性を紹介するものである。

2.「美術館の歴史を一冊の参考図書とする」試みとしての「企画展出品作家総索引」

現在、東近美の本館および工芸館における公開情報資源としては下記のものがある。

i. 所蔵作品情報に関わるもの

独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システム[6]

東近美を含む国立美術館4館の総合目録、2006年1月に本版公開。

ii. 所蔵図書に関わるもの

東近美図書館検索システム（OPAC）[7]

本館アートライブラリ、工芸館図書閲覧室およびフィルムセンター図書室の蔵書全体の検索システム

であるとともに、国内の美術図書館横断検索ALC[8]および海外のartlibraries.net[9]とも連携を果たしている。

iii. 開催展覧会の展覧会カタログに関わるもの

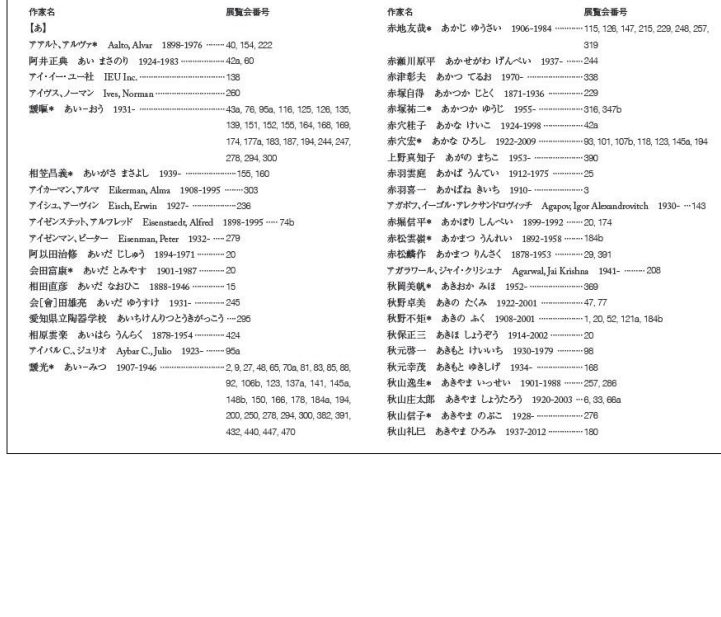
当該カタログの書誌データおよび収載論文は上記の東近美図書館検索システム（OPAC）に含まれ検索可能となっている。

『60年史』の評（註3）において、木下が「足りないものは出品作品のリストぐらい」と指摘しているように、いまだ東近美の歴史の堆積としての企画展出品作品へのアクセスを可能にする公開情報資源たるデータベースは構築されていない。その代替の一歩として、この度の『60年史』においては、1952年以降、483番目（延べにすると522）の「生誕100年　ジャクソン・ポロック展」までの東近美の「作家総索引」を編集して、『60年史』の付録CD-ROMにPDFファイルとして納めた[10]。2012年12月1日のPDF版においては、出品作家数8,564人、延べの出品展覧会数19,828件を収録する「作家総索引」であり、作家名の50音順およびアルファベット順の配列のもの2種を作成した（図2-1、図2-2、記載項目については3.5.2を参照のこと）。

作家名から出品企画展の展覧会番号へ、展覧会番号から展覧会カタログへ、そして出品企画展の展覧会カタログにおいて個々の出品作品情報へ辿るアクセスルートを担保することを『60年史』の企画立案の時点から想定提案して、実現した。

作成したPDFとして成った「作家総索引」は冊子に付属するのみならず、刊行と同時に当館のホームページに掲出している[11, 12]。

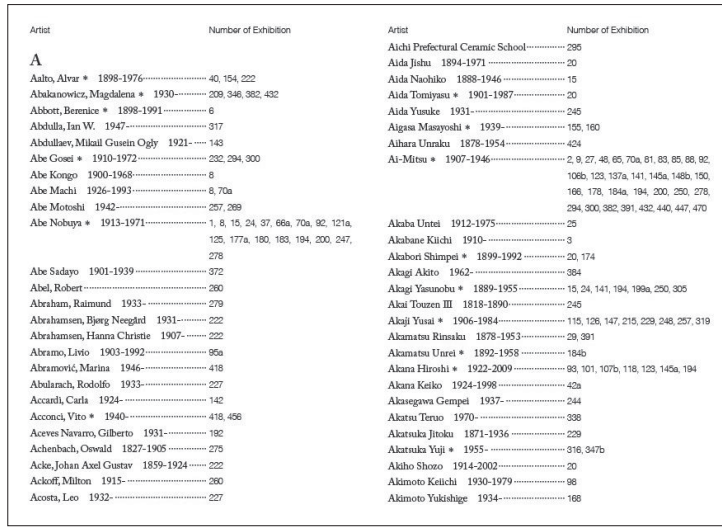
「作家総索引」の掲出の直後からは、本稿4章に詳述の通り、データベース化されるとともに、「作家総索引」は継続的に追加更新され、さらには出品作品情報の整備をも兼ね合わせつつ、「本館・工芸館企画展出品作家総索引（和・欧）検索システム」として公開に至っている[13]。2013年11月末日の本システムにおいては出品作家数8,639人、延べの出品展覧会数20,141件の「作家総索引」となっている。



作家名	展覧会番号
【あ】	
アアルト、アルヴァ＊　Aalto, Alvar　1898-1976	40, 154, 222
阿井正典　あい まさのり　1924-1983	42a, 60
アイ・イー・ユー社　IEU Inc.	138
アイヴス、ノーマン　Ives, Norman	260
藍澤＊　あいざわ　1931-	43a, 78, 95a, 116, 125, 126, 135, 139, 151, 152, 155, 164, 168, 169, 174, 177a, 183, 187, 194, 244, 247, 278, 294, 300
相笠昌義＊　あいがさ まさよし　1939-	155, 160
アイカーマン、アルマ　Eikerman, Alma　1908-1995	303
アイシュ、アーヴィン　Eisch, Erwin　1927-	236
アイゼンスタット、アルフレッド　Eisenstaedt, Alfred　1898-1995	74b
アイゼンマン、ピーター　Eisenman, Peter　1932-	279
阿以田治修　あいだ じしゅう　1894-1971	20
会田富康＊　あいだ とみやす　1901-1987	20
相田直彦　あいだ なおひこ　1888-1946	15
会[會]田雄亮　あいだ ゆうすけ　1931-	245
愛知県立陶器学校　あいちけんりつとうきがっこう	295
相原雲楽　あいはら うんらく　1878-1954	424
アイバル C., ジュリオ　Aybar C., Julio　1923-	95a
饗光＊　あいみつ　1907-1946	2, 9, 27, 48, 65, 70a, 81, 83, 85, 86, 92, 106b, 123, 137a, 141, 145a, 148b, 150, 166, 178, 184a, 194, 200, 250, 278, 294, 300, 382, 391, 432, 440, 447, 470

作家名	展覧会番号
赤地友哉＊　あかじ ゆうさい　1906-1984	115, 126, 147, 215, 229, 248, 257, 319
赤瀬川原平　あかせがわ げんぺい　1937-	244
赤津彰夫　あかつ てるお　1970-	338
赤塚自得　あかつか じとく　1871-1936	229
赤塚祐二＊　あかつか ゆうじ　1955-	316, 347b
赤穴桂子　あかな けいこ　1924-1998	42a
赤穴宏＊　あかな ひろし　1922-2009	93, 101, 107b, 118, 123, 145a, 194
上野真知子　あがの まちこ　1953-	390
赤羽雲庭　あかば うんてい　1912-1975	25
赤羽喜一　あかばね きいち　1910-	3
アガポフ、イーゴル・アレクサンドロヴィッチ　Agapov, Igor Alexandrovitch　1930-	143
赤堀信平＊　あかぼり しんぺい　1899-1992	20, 174
赤松雲嶺＊　あかまつ うんれい　1892-1958	184b
赤松麟作　あかまつ りんさく　1878-1953	29, 391
アガラワール、ジャイ・クリシュナ　Agarwal, Jai Krishna　1941-	208
秋岡美帆＊　あきおか みほ　1952-	369
秋野卓美　あきの たくみ　1922-2001	47, 77
秋野不矩＊　あきの ふく　1908-2001	1, 20, 52, 121a, 184b
秋保正三　あきほ しょうぞう　1914-2002	20
秋元啓一　あきもと けいいち　1930-1979	98
秋元幸茂　あきもと ゆきしげ　1934-	168
秋山逸生＊　あきやま いっせい　1901-1988	257, 286
秋山庄太郎　あきやま しょうたろう　1920-2003	6, 33, 66a
秋山信子＊　あきやま のぶこ　1928-	276
秋山礼巳　あきやま ひろみ　1937-2012	180

図2-1　50音順索引「本館・工芸館企画展出品作家総索引（和）PDF」(2012.12.1)
http://www.momat.go.jp/art-library/cc/4_artists_index_JPN.pdfにて公開



Artist — Number of Exhibition

A

Aalto, Alvar ＊ 1898-1976 …… 40, 154, 222
Abakanowicz, Magdalena ＊ 1930- …… 209, 346, 382, 432
Abbott, Berenice ＊ 1898-1991 …… 6
Abdulla, Ian W. 1947- …… 317
Abdullaev, Mikail Gusein Ogly 1921- …… 143
Abe Gosei ＊ 1910-1972 …… 232, 294, 300
Abe Kongo 1900-1968 …… 8
Abe Machi 1926-1993 …… 8, 70a
Abe Motoshi 1942- …… 257, 289
Abe Nobuya ＊ 1913-1971 …… 1, 8, 15, 24, 37, 66a, 70a, 92, 121a, 125, 177a, 180, 183, 194, 200, 247, 278
Abe Sadayo 1901-1939 …… 372
Abel, Robert …… 260
Abraham, Raimund 1933- …… 279
Abrahamsen, Bjørg Neegård 1931- …… 222
Abrahamsen, Hanna Christie 1907- …… 222
Abramo, Livio 1903-1992 …… 95a
Abramović, Marina 1946- …… 418
Abularach, Rodolfo 1933- …… 227
Accardi, Carla 1924- …… 142
Acconci, Vito ＊ 1940- …… 418, 456
Aceves Navarro, Gilberto 1931- …… 192
Achenbach, Oswald 1827-1905 …… 275
Acke, Johan Axel Gustav 1859-1924 …… 222
Ackoff, Milton 1915- …… 260
Acosta, Leo 1932- …… 227

Artist — Number of Exhibition

Aichi Prefectural Ceramic School …… 295
Aida Jishu 1894-1971 …… 20
Aida Naohiko 1888-1946 …… 15
Aida Tomiyasu ＊ 1901-1987 …… 20
Aida Yusuke 1931- …… 245
Aigasa Masayoshi ＊ 1939- …… 155, 160
Aihara Unraku 1878-1954 …… 424
Ai-Mitsu ＊ 1907-1946 …… 2, 9, 27, 48, 65, 70a, 81, 83, 85, 88, 92, 106b, 123, 137a, 141, 145a, 148b, 150, 166, 178, 184a, 194, 200, 250, 278, 294, 300, 382, 391, 432, 440, 447, 470
Akaba Untei 1912-1975 …… 25
Akabane Kiichi 1910- …… 3
Akabori Shimpei ＊ 1899-1992 …… 20, 174
Akagi Akito 1962- …… 384
Akagi Yasunobu ＊ 1889-1955 …… 15, 24, 141, 194, 199a, 250, 305
Akai Touzen III 1818-1890 …… 245
Akaji Yusai ＊ 1906-1984 …… 115, 126, 147, 215, 239, 248, 257, 319
Akamatsu Rinsaku 1878-1953 …… 29, 391
Akamatsu Unrei ＊ 1892-1958 …… 184b
Akana Hiroshi ＊ 1922-2009 …… 93, 101, 107b, 118, 123, 145a, 194
Akana Keiko 1924-1998 …… 42a
Akasegawa Genpei 1937- …… 244
Akatsu Teruo 1970- …… 338
Akatsuka Jitoku 1871-1936 …… 229
Akatsuka Yuji ＊ 1955- …… 316, 347b
Akiho Shozo 1914-2002 …… 20
Akimoto Keiichi 1930-1979 …… 98
Akimoto Yukishige 1934- …… 168

図2-2 アルファベット順索引「本館・工芸館企画展出品作家総索引（欧）PDF」（2012.12.1）
http://www.momat.go.jp/art-library/cc/5_artists_index_ABC.pdfにて公開

以上のように冊子、CD-ROM、Webを対象とする「メディア連携」を企図しつつ、刊行後も『東京国立近代美術館60年史』は、2012年以後の年史の一端を継続的に孕ませて成長していると言えるだろう。

以下、3章「PDF版「作家総索引」作成のプロセス」について渡邉が、4章「「作家総索引」のデータベース化とそのWeb公開」について布施が担当し、全体の章立てと調整および冒頭の2章を水谷が担当した。

通例、東近美紀要の本文は刊行とともに当館ホームページにPDFで全文公開している[14)]。本稿には納められなかったが、『60年史』の制作にあたったエディタスの高畑厚志氏による「『60年史』における漢字の字体」という論考を併せて掲出する。「作家総索引」に限らず『60年史』全体において漢字の表記と文字コードの問題は頭を悩ませた。その作業と考察をまとめていただいた。今後の美術館刊行物の作成にあたって一助としていただければ幸いである。

3. PDF版「作家総索引」作成のプロセス

3.1 はじめに

「作家総索引」とは、『東京国立近代美術館60年史』において「年史」に収録される展覧会記録を編纂する中で生成された副産物である。そのため『60年史』が対象とする年代幅、展覧会とも一致し、その刊行スケジュールにも制約されることとなった。「作家総索引」の進行手順はこうした諸条件に基づき、それが独立した企画として編纂された場合とは異なる。

編纂過程の詳細は以下に記す通りであるが、ここに全体のスケジュールを示す（表3-1）。「作家総索引」は、入力、検証、索引化、PDF版の作成という4つの工程を経て、刊行に至った。それぞれの作業を完結した上で次の工程に進むのではなく、工程に重なりがあったことが分かる。

表3-1 「作家総索引」作成タイムスケジュール

年	2011									2012											
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	●作業開始																			刊行●	
入力第1期	■	■	■	■	■																
入力第2期									■												
検証				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
索引化							■				■	■	■								
PDF版の作成																	■	■	■	■	

3.2 入力

3.2.1 実施時期

2011年4月、開館以来の展覧会に出品される作家名を、カタログに基づき入力を開始した。同年8月に開催中であった展覧会までの入力を終え、作業を中断する（入力第1期）。第2期としては2012年1月に、2011年9月以降の6展覧会、すなわち「作家総索引」の採録対象とする展覧会すべての入力を終了するとともに、入力の典拠資料をカタログのほかにも拡張した。

3.2.2 対象と範囲

「作家総索引」が採録対象とした展覧会とは、東近美において開催された展覧会のうち、1952年の国立近代美術館開館以来、展覧会番号と呼ばれる通し番号によって一連のものとして管理される企画展である。1977年に開館した東近美工芸館が企画した展覧会も含む。年代幅は1952年度から2011年度までとし、開館記念展である「日本近代美術展：近代絵画の回顧と展望」から「生誕100年　ジャクソン・ポロック展」までとなる。展覧会番号は483までとなるが、そのいくつかは同時期に複数の展覧会が開催されていた。これらはa、b、cといった枝番が付され、こうした枝番をもつものを個別に数えると、展覧会数は522となる。こうした展覧会の対象と範囲は冒頭にも断った通り、『60年史』と一致する。このほか東近美では、新収蔵作品のお披露目、またテーマ性をもって展示するものなど、コレクションを主体とする、いわゆる常設展（現在当館では「MOMAT コレクション」と呼称）も多く開催されるが、これらは通常、展覧会番号をもたない。以降本稿では、主として「作家総索引」の採録対象とした展覧会について論じ、断りのない限り、展覧会とは展覧会番号をもつものを意味する。

「作家総索引」に採録される出品作家とは、個人のみならずグループ、会社といった団体も含む。個人名を特定できない学生作品や作家名不詳の場合は登録されないが、イニシャルで表されていた場合は採録対象とした。

3.2.3　入力項目

当初の入力項目は、以下の通りである。

展覧会番号　仮番　作家名（日本人：漢字表記、読みがな　外国人：カタカナ表記、アルファベット表記）

展覧会番号は開館以来の通番であるが、上述の通り、そのいくつかは枝番をもつ。そこで作業の都合上、新たな番号を付し、同時開催のものも含め、採録対象となる展覧会すべてが個別の番号をもつように改めた。また仮番とは、入力時の典拠資料を再検証する際の手がかりとして、入力した順番の手控えである。

作家名についての情報は、日本人は漢字表記と読みがな、外国人はカタカナとアルファベットによる表記のみであった。この時点では、生没年についての情報はもたない。

入力作業については、2人の作業者によるダブルチェックを心がけた。

3.2.4　展覧会についての注記[15)]

「作家総索引」の採録対象となった展覧会とは主として企画展であるが、新収蔵品展など所蔵作品を中心としたものも含まれる[16)]。こうした展覧会は、現在では本館[17)]の場合、所蔵品ギャラリー「MOMATコレクション」で開催され、通例展覧会番号をもたない。1986年から98年にかけて本館全館を会場とした常設展示「近代日本の美術」が催された時、このうちのいくつかは展覧会番号をもつことから[18)]、展覧会番号をもつ展覧会の認識がその時々で異なる。

本館、工芸館が企画した展覧会が、この2館以外の会場で開催される例もある。ひとつは、フィルムセンター展示室を会場とするものである。1995年にフィルムセンターが建替えられた時、7階に展示室を設置した。時を同じくして、写真とデザインの2部門が新設される。フィルムセンター展示室を会場として、フィルムセンターだけでなく、写真、デザイン部門による展覧会も開催され、本館、工芸館が企画した展覧会は2001年までに17展が開かれた[19)]。2002年、ギャラリー 4 と名づけられた展示室が本館に誕生するとその役割を代えて、以後フィルムセンター展示室は、もっぱらフィルムセンターの企画による展示を行う。

さらには、増改築工事などにより自館では展覧会が開催できなかったため、他所で開催されたものも一連のものと認識される。1958年の京都市美術館を会場とした「近代日本絵画の歩み」に始まり、1961年度、2000-2001年と、京橋、北の丸公園での3回の増改築工事の折に12の展覧会が館外で開催され、なおかつ展覧会番号をもつ[20)]。このうち1961年度は展覧会が9つ開催され、会場は東京都内にとどまらず、仙台、札幌、大阪といった遠隔地に国立近代美術館のコレクションを披露する機会となった。

もう一例の館外での実施例は、1957年の「第1回東京国際版画ビエンナーレ展」である。出品点数が800点余りと多いことから徒歩圏内である有楽町の読売会館を会場とし、国立近代美術館は第二会場として特別陳列「歌麿と北斎」を実施した。

3.2.5 出品作家情報の入力のための典拠資料

出品作家採録の典拠資料としてまず用いたのは、展覧会に際して制作されるカタログ（出品目録）である。東近美アートライブラリでは、利用者が自由に手にとることができるように、閲覧室に開館以来の開催展覧会のカタログを配す[21]。またウェブページ「東京国立近代美術館開催　展覧会カタログ」では展覧会について、出品作家数、作品数、会場、会期などを表示するとともに、リンクによりカタログの書誌情報が入手容易である[22]。

展覧会についての情報を精査する中で、カタログが必ずしも全ての展覧会で制作されていた訳ではないことが判明した。そこで典拠資料をカタログ以外にも拡張する。

『国立近代美術館年報』は1957年に初めて刊行され、それは開館からの4年度分を収録した。以来タイトルの変遷はありながらも、今日まで続く逐次刊行物であり、その刊行頻度は概ね年刊である[23]。1975年度までに開催された202の展覧会については、出品目録が必ず年報に掲載されていたが、それ以降は目録の年報への掲載は不規則となる。

当初年報において、展覧会については、展覧会タイトル、会期、入場者数、展覧会概要、出品目録、パネル、カタログ、新聞雑誌関連記事という8つの項目が設けられていた。カタログが制作されず、『現代の眼』に目録が掲載と、年報に明記される展覧会が2つある[24]。かたやアートライブラリは所蔵していなかったが、年報にカタログの項目があることから、カタログが制作されていたことが分かる展覧会もあった[25]。

また年報にカタログの項目がなく、アートライブラリも所蔵されていなかったことから、カタログが制作されなかったと推定される展覧会が17ある[26]。これらは1954年から1965年にかけての京橋時代のことであり、こうした展覧会については年報記載の目録を典拠とした。

ここで問題となるのは、ひとつの展覧会について、カタログ、年報など、複数の目録が存在する事例である。いくつかの典拠をもつことから、それらに基づき入力することになるが、必ずしも内容が一致していない。例えばカタログのみ（年報に記載されない）、あるいは年報のみ（カタログに記載されない）に記載される作家など、記載内容に差異が発生していたこともあった。刊行時期を考慮すると、カタログあるいは『現代の眼』は、展覧会開催以前に発行される。刊行後に、不出品、追加出品などの修整すべき事項が生じ、会期中にカタログの訂正表が作成され、それがカタログに貼付される場合もある。一方、年報は、展覧会が終了した後、年度単位で編纂される。こうしたことから、カタログのみにしか名前のない作家は実際には不出品であり、逆に年報のみに記載される者は追加出品となったものとも推測できる。しかしながら現時点では正確な経緯が分からないことから、典拠とした資料のいずれかにしか載らない人物も含めすべて入力した。ただし、出品していないことが年報に明記される場合は、カタログのみにしかない作家は採録しなかった[27]。

展覧会の実情に即した記録として、内部資料として展覧会調書と呼ばれるものがある。これは展覧会の企画運営の実務に用いられた書類であり、現時点では一般に公開されていない。またすべての展覧会において作成、残されている訳ではない。カタログ、年報などとは異なり、外部に公表されていない調書のみを典拠とする情報は、他からは再検証しにくいことから、調書を作家が出品したか否かの判断材料

には用いなかった。ただし、以下に述べる検証作業の中で、作家の同定調査などにはこれを参照した。

カタログが制作されなかったことが推測され、年報に掲載される出品目録しか入手できない展覧会もあったことから、「作家総索引」はカタログのみを典拠として編纂することはできない。このように複数の資料に基づき編纂するうちに、展覧会の実情がいささか見えにくくなったきらいもあるが、今後、展覧会での出品の実態が分かる資料の発見と公開という前提条件の変化により、「作家総索引」では出品とされていた作家が見直される可能性がありうる。

3.3 検証

3.3.1 実施時期

入力第1期作業の終了を待たずに、2011年7月より検証作業を開始した。途中索引化、PDF版の作成が行なわれ、作業対象がデータから校正紙へと変わりながらも、「作家総索引」刊行の直前まで検証作業は続いた。

3.3.2 検証作業の対象

検証作業を開始する時点で入力項目を見直し、以下の項目を追加した。

4館DB作家名　※下記の「4館総合目録」における作家に関わるデータ群
（日本人：漢字表記、読みがな　外国人：カタカナ表記、アルファベット表記）
所蔵作家　生年　没年　典拠　備考

入力作業では、日本人、また漢字圏の外国人（中国、韓国、朝鮮）作家のうち、カタログなどでは漢字表記しかない場合、読みがなは入力しないままであった。この検証作業においては、すべての作家に読みがなを振ることを目標とし、読みの典拠が不確定である場合には末尾に★を付けた。

3.3.3 東近美所蔵作家調査

インターネットで公開されている独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システム[28]（以下「4館総合目録」）を用い、東近美の所蔵作家であるかの調査を実施した。「4館総合目録」は、国立美術館4館（東京、京都、西洋、国際）が所蔵する作品の総合目録を検索するものである。

「4館総合目録」では、2009年度までの収蔵作品と作家情報を2011年3月に公開している[29]。『60年史』が収録対象とするのは2011年度までであるが、「作家総索引」作成の最中には、「4館総合目録」に直近の2年度分は反映されない。そこで『独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館活動報告』、また館内外より情報を入手の上、照合した。

調査の結果、4館のいずれかにその作が所蔵されると判明した場合、「4館総合目録」での表記を「4館DB作家名」の項に記し、さらに自館がその作品を所蔵する作家には、「所蔵作家」の欄に印を付けた。国立美術館傘下の複数の館が特定の作家の作を収蔵する時、名前を館それぞれが異なって登録する場合もある。こうした場合は、自館の表記を採用し、日本人の場合、それ以外は参考情報とした。現在、東近美の所蔵品目録は「4館総合目録」のほかに、過去に編纂、刊行された冊子体のものある。これらに

差異があった場合には、冊子体に倣う。照合作業の中で「4館総合目録」の入力ミス、未登録といった不備が見つかった場合は、それぞれの館に修整を依頼し、内容の更新を図った。

3.3.4 検証作業の実際

検証作業は、正しく入力されたかどうか、入力時の典拠資料との照合に始まった。さらには典拠資料には不足していた作家情報の追跡調査、刊行時点での誤記を含めた修整を行う。名前には、カタログによって表記の揺れが見受けられる。自館の収蔵作家であれば館の方針に従い、そうでない場合は近年の事例を採用して、統一的な表記を試みた。作家の生没年も、この検証段階において調査、入力した。工芸やデザイン、「フランス映画史展」(1962年)の作家については、工芸館、フィルムセンターの担当者の力も借りた。

作家情報の追跡調査は、日本人に重点をおいて実施し、図書、画集、他の美術館による展覧会カタログ、所蔵品目録ほか、アートライブラリの蔵書も参照した[30]。あわせてアートライブラリが自作する、美術関係者の主として物故記事を集めた「作家シート」[31]と呼称するファイリング資料も大いに活用し、こうした検証作業で参照したものを「典拠」欄に記した。

外国人の場合は、カタログには姓のみが記され、フルネームが分からない者もある。またカタカナ表記だけで、アルファベット表記がないものなど、調査の手がかりが乏しい例もあった。

検証作業の中で出品作品の所蔵先に照会し、その作者が所蔵先においては、展覧会開催時と今日では異なるように認識される場合もある。この時、展覧会開催時点での作家認識を尊重し、現在の認識によるものには改めなかった。

3.4 索引化

「作家総索引」における索引化とは、1952年の開館展から2012年のポロック展までの出品作家の作家名から出品の展覧会番号を照会する機能をもたせることである。

索引化は館内部と外部委託の2回行ない、館内では2011年10月実施、館外へは2012年2月に依頼した。

館内での索引化によって、出品作家の概数を把握できたほか、二重登録の洗い出しにも役立てた。この結果に基づきカタログなど入力時点での典拠資料と再検証を行なった。

2度目となる索引化の作業は、株式会社日外アソシエーツに業務を委託した。検証作業の時点でも、日本人作家はアルファベット表記をもたない。そこで索引化の一環として、読みがなのローマ字化が行なわれた。この時、推定による読みの作家は読みがなと同様に、アルファベット表記にも★を付す。あわせて、見出しとした名前以外からの参照、典拠資料では漢字表記のみである日本人作家の読み、カタカナ表記しかなかった外国人作家のアルファベット表記、同一作家の指摘、そして凡例の記述など、数々の専門的な助言が授けられた。

2012年5月に索引化作業が終わり、データのほか、50音順、アルファベット順という2種の作家索引を得る。索引化作業と並行して検証作業も進行しており、この間の判明事項を索引に反映させた。索

引に対する検証作業としては、索引と入力典拠資料のほか、50音順とアルファベット順の2種の索引の相互対照も試みた。

3.5 PDF版の作成と刊行

3.5.1 実施時期

「作家総索引」は『60年史』本編の附録として、CD-ROMにデジタルデータとして収録されることになった。そのため「作家総索引」の最終的な編集期限は、紙媒体である本編よりも遅れ、若干の時間的猶予ができた。

PDF版は3.4で得られたデータを元に、年史の編集会社が作成した。3.4の50音順、アルファベット順の索引と記載項目は同じであるが、体裁は異なる。2012年8月に編集会社による50音順、アルファベット順の索引を紙媒体で入手、その検証作業を開始した。11月には検証作業を完了してPDF版としてCD-ROMに収め、12月には本編とともに刊行となった。

3.5.2 記載項目

PDF版の「作家総索引」は、50音順（和）、アルファベット順（欧）の2版作成された[32)]。それぞれの記載項目は以下の通りである。

50音順索引（和）
作家名（漢字圏：漢字表記、漢字圏以外：カタカナ表記）　読みがな（漢字圏のみ、ひらがな表記、推定読みの場合は★を付ける）　アルファベット表記（日本人以外）　生没年　展覧会番号

アルファベット順索引（欧）
作家名（アルファベット表記、推定読みに基づく場合は★を付ける）　生没年　展覧会番号

なお、東近美がその作品を所蔵する場合は、作家名の後ろに＊を付けた。外国人作家のうちには、入力時に用いた典拠資料の記載内容によっては、苗字しか記されておらず個人を特定できない場合、またアルファベット表記が判明しなかった者もあった。そのため50音順版に記載されるものの、アルファベットでの見出しが作成できないことから、アルファベット順版に収録されない人物もある。そのため作家索引2種の収録作家数は異なり、50音順の方が多い。

3.5.3 『60年史』本編と「作家総索引」との連関

「作家総索引」は、『60年史』において「年史」に収録される展覧会記録を編纂する中で生成された副産物であり、独立した編纂物として附録に収録された。同時に、本編に収録される展覧会記録のうち、出品作家の情報を補う役割を果たす。

本編では展覧会について、出品作家が大よそ30名程度の場合は、その名前を和表記で記載した。40名以上に及ぶ場合は、人数のみを記載して本編に個別にその名前を記すことはなかった。「作家総索引」は作家の名前を見出しとして、出品作家すべてを網羅する。展覧会単位で出品作家を知るには、4章に

記載の「本館・工芸館企画展出品作家総索引（和・欧）検索システム」によって可能になっている。

『60年史』本編と「作家総索引」においては、共同制作の場合の作家の表記法が異なる。本編では共同制作であることを尊重して、名前を表示する場合には「＋」で人物名をつなぎ、個々を数えるのではなく組で表記した。一方、索引では個人を尊重し、個別に項目を立てている。

3.6 「作家総索引」のデータベース化と今後の発展について

『60年史』刊行以後、「作家総索引」のPDF版2種のウェブ上での公開とともに、データベース化が計画された。データベースの基盤としたデータは、3.4の索引化作業の結果である。すなわちこれは、2012年2月に索引化を依頼した時点のデータに基づく。上述したように検証作業が索引化と並行、また刊行に至る時点まで継続された。その判明事項の反映は常に紙媒体で行われ、データそのものを改めることはなかった。そこで、データベースの基盤整備として、PDF版での記載事項と3.4の作業結果であるデータとを対照させた。差異が認められた時には、PDF版での記載事項に倣い、データに追加、修整を行った。

3.7 「作家総索引」データベースの公開以後の成果と課題

「作家総索引」は入力、検証、索引化、PDF版の作成という4つの工程を経て、刊行に至った。それに費やした年月は1年半あまりと短いものであった。また「作家総索引」作成に携わった人員もそれに専念できたわけではなく、『60年史』編集作業との兼任である。『60年史』の刊行後、その発展形としてデータベースの構築、公開が企画、実施された。「作家総索引」作成作業の始まりの時点でこうした最終地点を見通すことができなかったため、作業計画を充分に整えることができなかった。入力項目を検証作業の段階で追加したこと、また検証作業を十全に終えられることなく索引化を行い、検証作業がいつまでも継続したことなど、事前に作業手順をよく検討すれば、手間を軽減することができたかもしれない。

「作家総索引」は『60年史』刊行の一環として計画されたものであり、時間の制約から、検証作業には粗密がある。また、PDF版作成、データベースの基盤整備のそれぞれの段階でもミスは発生している。「作家総索引」PDF版は固定化されたデータであるが、データベースでは改めることもできる。PDF版作成にあたっては、カタログなど自館の資料を出発点としながらもそれ以外も参照して、最善を尽くした検証作業に基づく。カタログとデータベースとを対照した時に、差異を発見した利用者は何故にこうした違いが発生するのか疑問を抱くことだろう。今後、PDF版作成で利用した典拠情報をいかに提示するかが、ひとつの課題である。

「作家総索引」作成の成果としては、入力典拠とする資料を精査することにより、これまで東近美において開催されてきた展覧会の出品目録の所在が明らかとなったことが、第一に挙げられよう。

「作家総索引」あるいはそのデータベースを利用することで、カタログ書誌の登録情報からでは読み取れなかった、出品作家の全貌が明らかになった。これまでカタログ書誌には、注記として年報に基づいた出品作家の数が記載される。「作家総索引」ではその典拠を年報のみならず、カタログなどにも広げたが、データベースを利用することで、出品作家数と具体的な名前が分かる。展覧会の名称からは作家の個展のように見えるが、複数人が出品しているものも判明した[33)]。

1957年から11回に渡り開催された安井賞候補新人展については、データベースが出品作家索引の役割を果たす。1999年に刊行された『安井賞展40年史』[34]にはそれぞれの回の出品目録と図版が掲載されるが、索引はもたない。そこで、最初の11回と範囲は限られるが、複数回出品していた作家を簡便に調べる情報源として、データベースを利用することができる。

また、展覧会カタログには、作品の図版が掲載されることが多い。特定の作家の図版を探索する一助として、「作家総索引」を用いることもできる。

さらには、東近美における作家評価を推測するツールのひとつともなる。2011年度に開催された展覧会を例に挙げると、同年度では10の展覧会が開催されたが、このうち8つは個展である。この8人の作家が出品された展覧会と、作品収蔵時期もあわせて一表とした(表3-2)。こうした表を分析することによって、東近美が60年の歴史の中で、どのような作家に関心を寄せ、その結果として、展覧会開催、あるいは作品購入という行為が行われたのかが判明することだろう。

このようにデータベース化され随時追加更新されていく「作家総索引」は今後、東近美の企画展について多面的な解析を可能にするものと期待できる。

表3-2「2011年度個展開催作家に見る出品歴と作品収蔵時期」

展覧会番号	展覧会名	作品の収蔵年度	2011年度より前の出品展覧会数	出品展覧会番号										
475	パウル・クレー：おわらないアトリエ	1987	11	2	13	15	148a	165	207	235	347b	369	382	391
476	レオ・ルビンファイン：傷ついた街	—	0											
477	イケムラレイコ：うつりゆくもの	1990	4	302	382	386	451							
478	グェッリーノ・トラモンティ展 イタリア・ファエンツァが育んだ色の魔術師	2011	1	114a										
479	ヴァレリオ・オルジャティ展	—	0											
481	原弘と東京国立近代美術館 デザインワークを通して見えてくるもの	2012	3	3	295	388								
482	「織」を極める：人間国宝　北村武資	1998	5	257	389	390	444	446						
483	生誕100年 ジャクソン・ポロック展	2007	11	134	150	152	235	262	335a	335b	382	391	418	432

※作品収蔵年度は、東京国立近代美術館にその作家の作品が初めて収蔵された年度とした。ルビンファイン、オルジャティは収蔵作家ではない。

4.「作家総索引」のデータベース化とそのWeb公開

4.1　基本構造

2012年12月より早速に「作家総索引」PDF版の作成でまとめられた「出品作家総覧データ構成表」(表4-1)を元にデータベース化作業を始めた。

構成表はPDF版と同様に、出品作家の50音順とアルファベット順、それぞれに配列表示用に分けて作成されていたが、データベースにおいては配列表示のページは設けず、検索からヒットの一覧、そして詳細を表示することを前提とし、この二つは統合して扱った。

この構成表には15種類の項目が設けられており、PDF版で出力された項目はこの内の6項目であるが、データベースへの取り込み作業においては、この6項目以外にも蓄積してゆくことで今後有用となる

と思われる項目も含んで対象とし、そのままデータを引き継いだ。また、作家の情報を管理してゆくために必要となる新たな項目である「備考」「典拠」の2つを追加して作家情報の基本データとした。

表4-1 作家情報のデータベース変換状況

	PDF版データの項目名	PDFへの出力	DBへの取込	Webへの出力	Webページへの表示方法
1	管理番号	×	○	○	作家ID
2	作家名	○	○	○	作家名(和)
3	作家名よみ	○	○	○	作家名よみ
4	作家名よみ(ソートキー)	×	○	×	
5	生没年	○	○	○	生没年
6	生年	×	×	×	
7	没年	×	×	×	
8	ローマ字表記(元)	×	×	×	
9	東近美所蔵	△	○	○	「所蔵作家マーク」で表示
10	日本人ファイル由来識別	×	○	×	
11	ローマ字表記	×	×	×	
12	表示用原綴・ローマ字表記	○	○	○	作家名(欧)
13	(原綴・ローマ字処理用)	×	×	×	
14	原綴・ローマ字ソートキー	×	○	×	
15	展覧会番号(通番)	○	○	○	展覧会番号
		—	—	○	memo
		—	—	○	典拠

展覧会の情報については、PDF版の展覧会番号と紐づいている『60年史』で使用した展覧会データを主な基礎データとし、追加項目として東近美アートライブラリで集積、管理されてきた「展覧会カタログ(OPAC)情報」、「東近美ホームページの展覧会Webページ URL」などのデータもつけ加えて基本データとした。

表4-2 展覧会情報のデータベース変換状況

	データ項目名	DBへの取込	Webへの出力	Webページ表示方法
1	x	×	—	作家ID
2	通番	○	○	作家名(和)
3	工番	○	×	作家名よみ
4	カタログ有無	×	—	
5	展覧会名(和)	○	○	展覧会タイトル
6	会期1(始)	○	○	会期の開始日
7	会期1(終)	○	○	会期の終了日
8	年度(和)	○	○	年度
9	年度(西)	○	○	
10	会場	○	○	会場
11	カタカナ読み	○	×	
12	並べ替え用	○	○	
13	作家数	○	○	作家数
14	作品数	○	○	作品数
15	共催者有無	×	—	

	データ項目名	DBへの取込	Webへの出力	Webページ表示方法
16	共催者1	○	○	共催者
17	共催者2	○	○	共催者
18	巡回有無	×	—	
19	会期日数	×	—	
20	会期入場者数	○	○	
21	平均入場者数	×	—	
22	GO	×	—	
23	展覧会種別	○	○	種別
24	ポスター数	×	—	
25	カタログ(OPAC)	○	○	存在する場合は、「Opacリンク」マークを表示
26	ウェブページurl	○	○	存在する場合は、「Webページリンク」マークを表示

以上2つのデータを元に、東近美内の公開できる既存のサーバー上にmysqlのデータベースを作成し、PHPを用いて動的に表示されるWebページのシステムとした。

Webページ上の情報構造としては、作家と展覧会の情報及び、後述する出品作品の情報を合わせた3つの要素を同レベルとして扱い、相互にリンクする形をとっている。

そのため“作家の情報から出品展覧会をたどる”という索引的な一方通行の結果で終わらせずに、作家情報を検索してたどりついた情報の画面は、他の作家や展覧会への新たな情報の入り口となるリンクが表示される。システムの利用者はこのリンクを利用して、容易に3方向の視点を切り替えて閲覧できる仕組みとなっている。

また、本システムではインターネットというリソースを生かして、情報の広がりを持たせるよう、東近美における作家に関する他データベースの情報と突き合わせを行い、リンクを付加している。他データベースでは扱われていない作家や、同一の作家として特定できないケースもあるため、付加情報を持たない作家も多く存在するが、これらを利用することで本システムでは直接提供できない「作品画像」への手がかりとなることを期待している。

◉作家に関する情報リンク

- 独立行政法人国立意美術館 所蔵作品総合目録検索システム[35)]
- 東京国立近代美術館アートライブラリ　作家ファイル・作家シート検索[36)]
- 「作家名」をGoogle検索

◉展覧会に関する情報リンク

- 東京国立近代美術館展覧会ページ
  http://www.momat.go.jp/index.html
- 東京国立近代美術館OPACのカタログ情報[37)]
- 開館60周年記念サイト　目でみるMOMATの歩み　ポスターアーカイブ
  http://www.momat.go.jp/momat60/archive/
- 「展覧会名」をGoogle検索

上記の他に、東近美内部における美術作品データベースである「美術作品管理システム」と照らし合わせるための情報も追加している。これはWeb上での公開に関係しない情報であるが、美術館内の作家情報と紐付けすることで、定期的に比較しメンテナンスすることを目的としている。

表4-3「付加情報別データ数」　2013年11月現在

作家関連リンク	所蔵作品総合目録検索システム	2,276
	作家ファイル・作家シート検索	2,638
展覧会関連リンク	東京国立近代美術館展覧会ページ	151
	東京国立近代美術館OPAC	517
	ポスターアーカイブ	312

4.2 使い方の一例

画面イメージを用いて、本システムの具体的な操作方法について述べる。

図4-1 TOP画面

＜検索項目＞
・作家名（和）・作家名（かな）・作家名（欧）・展覧会名（和）・展覧会名（欧）・出展作品名

TOPページには検索の項目が並ぶ。利用者は任意の検索項目を選択してテキスト欄に作家名などを入力し、検索ボタンを押下する。検索はいずれの項目も中間一致で抽出される。

図4-2 検索結果画面

検索結果は一覧で表示される。該当する作家が表示されていれば、「作家名」のリンクを押下して「作家詳細」画面に移動する。

図4-3 作家詳細画面

＜作家詳細のおもな項目＞
・作家名（和）・作家名（欧）・作家名（よみ）・生没年・memo・典拠・Link（出品作品リスト／所蔵作品総合目録検索リンク／AFS リンク／Google検索リンク）

「作家詳細画面」には中央に作家の基本的な情報が並び、下段にはこれまで出品された展覧会の名前がリスト表示される。情報の件数が66とあることから、梅原龍三郎はこれまでに66の展覧会に出品されたということが分かる。「展覧会名」リンクを押下すると「展覧会詳細」画面に推移する。

図4-4 展覧会詳細画面

＜展覧会詳細のおもな項目＞
・展覧会名（和）・展覧会名（欧）・展覧会番号／種別／年度・会期・作家数／作品数・共催者・Link（展覧会ウェブページリンク／展覧会カタログ（OPAC）リンク／ポスターアーカイブリンク／出品作品リスト／Google検索リンク）

「展覧会詳細画面」も作家詳細の画面と同様に中央に基本情報が表示される。下段には、この展覧会に出品した作家の名前が並ぶ。情報の件数が35とあることから、この展覧会には35人の作家の出品情報があることが分かる。いままでの操作と同様に、ここに並ぶ作家の名前のリンクをたどれば別な作家の詳細画面に移動する。そこから、また異なる作家、異なる展覧会の視点で情報を追うことができる。

4.3 PDF版以降のデータの追加更新について

データベースが作成公開後に広く活用されていくためには、情報の正確さや更新頻度など、一定の質を保ったデータを蓄積し、利用者の信頼を得ることが必要になる。本システムにおいても、日常的な利用から次の年史を編纂する際の基礎データとしても活用されることを視野にいれて日々更新作業を進めている。

作業については、東近美アートライブラリ担当者と情報研究担当者で行っているが、非常勤であるため同じ人物が永続的に作業を担うことは難しい。よって、できるだけ長くに作業を継続してゆくための手段として、運用ルールの単純化、作業工程の最適化が求められる。例えば、本システムの展覧会情報は東近美アートライブラリとしてウェブ上に公開している情報Webページ「東京国立近代美術館開催 展覧会カタログ」の情報を更新することで更新される。これはデータベースを統合し、同じ内容の情報公開を二ヶ所で行う手間を省いた結果である。よって、本システムの展覧会情報はカタログがアートライブラリに到着するとともに作成が開始され、一週間程度で新しい展覧会の情報が追加されることになる。ま

た、出品作家の情報についても『60年史』のように多方面にソースを求めずウェブ上で公開される「出品作品リスト」のデータに限定にした。

リスト上で作品の「作家」として名前が掲載されている人物を「出品作家」として扱い、既にシステムに登録されていれば新たな展覧会との紐付けを行い、なければ追加するという単純なルールを設定することで作業効率の最適化を図っている。

同じように、作家をシステムに新規登録する場合についても、作業効率を考慮して現在は特定の典拠を定めて収集を行っている。

◉作家情報 典拠

印刷物：展覧会カタログ、辞書・辞典[38)]

その他：OPAC、作家個人のウェブページ、国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス（http://id.ndl.go.jp/auth/ndlsh）など

作家情報に関しては、運用上いくつかの問題がある。例えば、登録時に没していない作家については、いずれ没年の情報を更新しなくてはならない。しかし、作家情報 約8,700件のうち、没年が空欄である作家 約3,600件に対して、いつ到達するか不明な情報を追いかけるのは困難である。東近美アートライブラリに蓄積されている「作家シート」[39)]などに定期的に照会をかけるなども検討しているが、現在もその方法を模索中である。

その他にも、「複数の作家名を使い分けている作家」、「複数の作家が連名で単一の作家名を使用している場合」、「襲名での名前変更」など、活動中の作家の情報更新については多くの課題が山積している。

こうしてPDF版の最終展覧会「生誕100年 ジャクソン・ポロック展」以降のデータ作成は進められ、開催中の企画展まで追いつくことができた。更新の状況としては、展覧会開催前後に展覧会の情報が、展覧会終了までには出品作家や出品作品の登録を完了することが実現できている。よって、利用者は“一番古い情報”から“一番新しい情報”まで本システム一つで検索が可能である。

表4-4 「本館・工芸館企画展出品作家総索引（和・欧）検索システム収録データ数」 2013年11月現在

展覧会総数	1952.12.1-2013.11.30	536
出品作家総数	1952.12.1-2013.11.30	8,631

表4-5「出品作品関連 データ数」 2013年11月現在

出品作品 総件数	11,291
出品作品情報が閲覧可能な作家数	1,566（8,631人中）
出品作品情報が閲覧可能な展覧会数	85（536展覧会中）

4.4 出品作品情報について

展覧会の出品作品の情報は、会場で配布される印刷物、展覧会Webページ及び、カタログなどで提供されている。これらの情報は、印刷物、PDF、HTMLというように媒体や形式が異なり、また、表記方法も展覧会ごとにさまざまであるため一元化はされてこなかった。しかし、整理されてはいないが、デジタルデータが存在することや、印刷物のデジタルデータ化が容易になった環境をふまえ、本システムにおいてデータベースとしてまとめることを試みた。『60年史』においてまとめられた作家情報や展覧会情

報とは異なる経緯で始めたため、出品作品に関するデータの追加作業は現在進行形で行われており、随時公開するという形をとっている。

先に述べたとおり、現在ウェブページまたは、カタログ等で公開されている出品作品リストは、その時々で表記の項目が異なる。本システムではこれらをなるべく統一した形で表示させるため、項目は最小限にとどめている。

表4-6「出品作品リスト　項目名」

1	展覧会No
2	作家名(和)
3	作品名(和)
4	作品名(欧)
5	制作年
6	技法　ほか
7	所蔵

そのため、同じタイトル、同じ制作年、同じサイズの作品が並ぶ場合は、リスト表示の画面では作品の判別がつかない場合がある。また、より幅広い層のユーザーを意識して欧文の項目を設けているが、技法や所蔵先情報については欧文で表示できているものは少ない。

制作年の表記についても、西暦4桁のみのもの、年が追加されたもの、和歴を使用したもの、circaを用いているものや「頃」としているものなど統一はしていない。これは、元のデータを改変することなく、なるべくそのまま使用する方針をおいて作業しているためであるが、全ての作品データがまとまったところで統一の表記方法を検討したい。

その他、出品作品リストに関する問題点として「作品」以外の出品物がある。例えば、スケッチ帳や手紙類、掲載雑誌、映像作品などがこれにあたる。本システムでは、ソースとなる出品作品リストに掲載されている場合は、出品作品と同様に表示されるが、単体の作家に紐づけることができない場合は作家名を空欄としている。一方、特定の作家に対して紐づけられる場合は、作家名に括弧を用いて「関連物」として区別した。

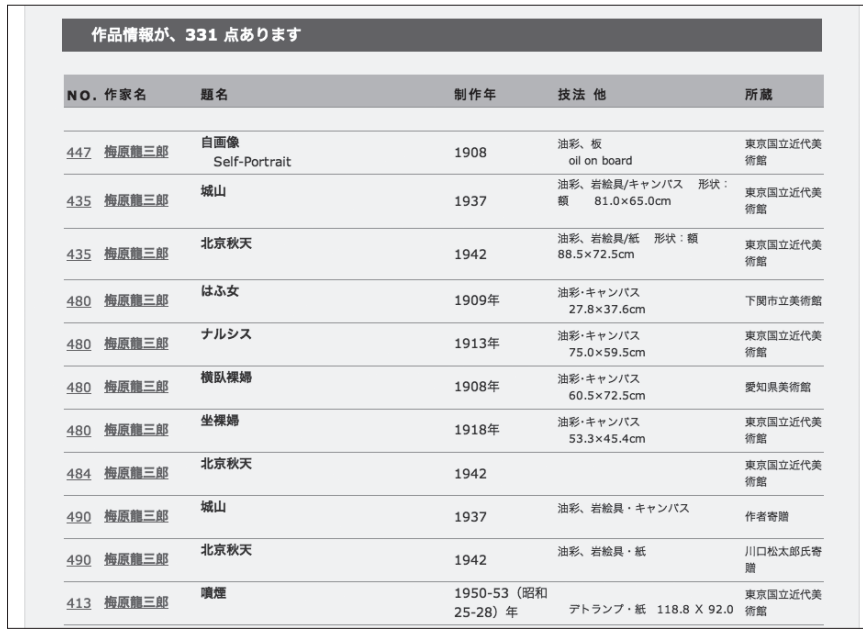
以上のように様々な問題はあるが、展覧会を構成する要素の一つとして出品作品リストは作成され、“展覧会単位での作品”及び、“作家単位での作品”という新しい視点を本システムにおいて提供している。

作品情報が、126 点あります

NO.	作家名	題名	制作年	技法他	所蔵
484	浅川伯教	鶏龍山周辺窯跡図	c.1920s-30s		大阪市立東洋陶磁美術館
484	新井謹也	肉池	不詳		
484	梅原龍三郎	北京秋天	1942		東京国立近代美術館
484	河村喜太郎	青磁古瓦文肉池	不詳		
484	龍村平蔵	漢羅「楽浪」	1927		龍村美術織物
484	津田信夫	塞外漫歩	1940		メタルアートミュージアム光の谷
484	沼田一雅	胡砂の旅	1937		京都国立近代美術館
484	山鹿清華	熱河壁掛	1937		東京藝術大学大学美術館

図4-5 作品リスト(展覧会単位)

展覧会詳細画面から「List」アイコンを押下すると、展覧会に出品された出品作品がリスト表示される。「作家名」リンクからは作家詳細画面へ、展覧会番号（No.）のリンクからは展覧会詳細画面へと移動できる。



作品情報が、331 点あります

NO.	作家名	題名	制作年	技法 他	所蔵
447	梅原龍三郎	自画像 Self-Portrait	1908	油彩、板 oil on board	東京国立近代美術館
435	梅原龍三郎	城山	1937	油彩、岩絵具/キャンバス 形状：額 81.0×65.0cm	東京国立近代美術館
435	梅原龍三郎	北京秋天	1942	油彩、岩絵具/紙 形状：額 88.5×72.5cm	東京国立近代美術館
480	梅原龍三郎	はふ女	1909年	油彩・キャンバス 27.8×37.6cm	下関市立美術館
480	梅原龍三郎	ナルシス	1913年	油彩・キャンバス 75.0×59.5cm	東京国立近代美術館
480	梅原龍三郎	横臥裸婦	1908年	油彩・キャンバス 60.5×72.5cm	愛知県美術館
480	梅原龍三郎	坐裸婦	1918年	油彩・キャンバス 53.3×45.4cm	東京国立近代美術館
484	梅原龍三郎	北京秋天	1942		東京国立近代美術館
490	梅原龍三郎	城山	1937	油彩、岩絵具・キャンバス	作者寄贈
490	梅原龍三郎	北京秋天	1942	油彩、岩絵具・紙	川口松太郎氏寄贈
413	梅原龍三郎	噴煙	1950-53（昭和25-28）年	デトランプ・紙 118.8 X 92.0	東京国立近代美術館

図4-6 作品リスト（作家単位）

作家詳細画面で「List」アイコンを押下すると、作家単位で作品がリスト表示される。展覧会番号（No.）から、出品された展覧会を判別することができる。例えば、繰り返し表示されている、梅原龍三郎《北京秋天》はこれまで複数の展覧会に出品されてきたことが見てとれる。

おわりに

「作家総索引」のデータベース化とその公開としての「本館・工芸館企画展出品作家総索引（和・欧）検索システム」は、3章の末尾に記した通り『60年史』の刊行以後も日々継続して更新されている。このシステムが東近美の展覧会と出品作家に関わる「一冊の参考図書」であるとともに、情報源の加工によって東近美の企画展について多面的な解析（例えば表4-7、4-8のような）の一助に成長することを重ねて期待している。

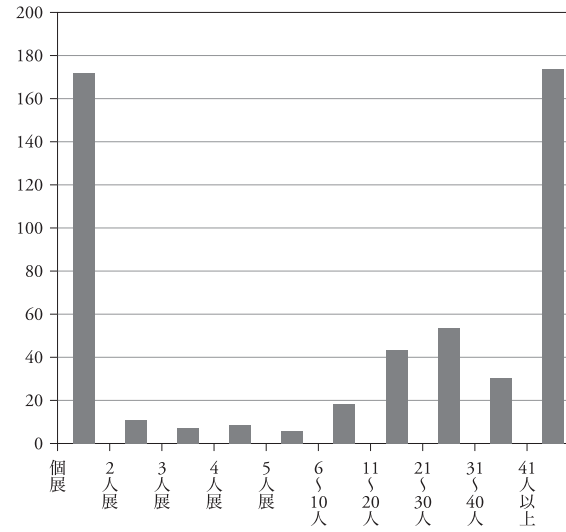
（水谷長志／独立行政法人国立美術館本部情報企画室長、東京国立近代美術館企画課情報資料室長）
（渡邉美喜／東京国立近代美術館企画課研究補佐員）
（布施 環／東京国立近代美術館企画課情報研究補佐員）

表4-7「出品展の多い作家ベスト30」

順位	作家名	展覧会数
1	梅原龍三郎	66
2	安井曽太郎	58
3	岸田劉生	57
4	萬鉄五郎	53
5	安田靫彦	51
6	前田青邨	51
7	須田国太郎	49
8	土田麦僊	47
9	福沢一郎	47
10	小林古径	47
11	横山大観	47
12	古賀春江	47
13	藤田嗣治	47
14	藤島武二	46
15	山口長男	45
16	中村彝	44
17	坂本繁二郎	44
18	海老原喜之助	43
19	小出楢[楢]重	43
20	村井正誠	42
21	徳岡神泉	42
22	林武	42
23	斎藤義重	41
24	佐伯祐三	41
25	山口薫	40
26	村上華岳	40
27	瑛九	40
28	前田寛治	40
29	児島善三郎	39
30	川端龍子	38

表4-8「出品作家数の分布」

出品作家数	該当する展覧会数
個展	172
2人展	11
3人展	8
4人展	9
5人展	6
6～10人	19
11～20人	44
21～30人	54
31～40人	31
41人以上	174
計	528



註

1) 松本透「[イベント報告]東京国立近代美術館60周年記念シンポジウム：近代美術館の誕生：前史から未来へ」『現代の眼』598号, 2013年2/3月, p. 10.

2) 水谷「二冊の六〇周年記念刊行物『60年史』と『美術家たちの証言―東京国立近代美術館ニュース『現代の眼』選集』について」『現代の眼』597号, 2012年12-2013年1月, pp. 8-9.

3) 木下直之「『東京国立近代美術館60年史』　美術館のはかなさを編む」『現代の眼』600号, 2013年6/7月, pp. 8-9.

4) 水谷「メディア連携を企図する館史としての『東京国立近代美術館60年史』―「美術館の歴史を一冊の参考図書とする」試み再論」『アート・ドキュメンテーション通信』96号, 2013年1月, pp. 8-10.

5) 水谷「美術館の歴史を一冊の参考図書とする」『アート・ドキュメンテーション通信』56号, 2003年1月, pp. 4-6.

6) http://search.artmuseums.go.jp/　以下、いずれのURLも2013年11月30日に参照。

7) http://kinbiopac.momat.go.jp/mylimedio/search/search-input.do

8) http://alc.opac.jp/

9) http://www.artlibraries.net/index_en.php　artlibraries.netについては本誌本号に掲載の論文「アジアからの美術書誌情報の発信―東京国立近代美術館・国立西洋美術館OPACのartlibraries.netにおける公開の経緯とその意義」を参照されたい。

10) 付属CD-ROMには下記を併録、(　)内の日付において当館ホームページに掲載(http://202.236.109.47/AFS/gendai/gendai_ichiran_all.php)している。
覆刻　隈元謙次郎「連載　日本における近代美術館設立運動史」(2012.10.23)
『現代の眼』総目次1号(1954年12月)-第594号(2012年6/7月)総目次　(2012.12.1)
『現代の眼』著者名索引(2012.12.1)
『現代の眼』特集名一覧(2012.12.1)

11) 50音順索引「本館・工芸館企画展出品作家総索引(和)PDF」(2012.12.1)　http://www.momat.go.jp/art-library/cc/4_artists_index_JPN.pdf

12) アルファベット順索引「本館・工芸館企画展出品作家総索引(欧)PDF」(2012.12.1)　http://www.momat.go.jp/art-library/cc/5_artists_index_ABC.pdf

13) http://www.momat.go.jp/art-library/AI/menu.html

14) http://www.momat.go.jp/research/index.html

15) 『東京国立近代美術館60年史　1952-2012』東京国立近代美術館, 2012, 884p. に収録される以下の論文を参照のこと。中林和雄「本館の企画展」pp. 43-56、蔵屋美香「本館のコレクションと所蔵作品展」pp. 57-73、唐澤昌宏「工芸館の企画展」pp. 81-92、諸山正則「工芸館のコレクションと所蔵作品展」pp. 93-101、保坂健二朗「『オルタナティヴ・スペース』としてのギャラリー4」pp. 837-838.

16) 直近では、1996年に開催された347b「新収蔵作品展:日本画 油彩その他 水彩 素描 版画 彫刻 写真」がある。以下、展覧会名を記すのは煩雑になるため、場合により展覧会番号と開催年のみとした。その際、展覧会名については、「東京国立近代美術館開催　展覧会カタログ」http://www.momat.go.jp/art-library/AFS/gendai/exh_cat.phpを参照のこと。

17) 東近美は、1952年、京橋に国立近代美術館として開館した。1969年に京橋より北の丸公園へと新築移転した後、旧館を改修して翌1970年にフィルムセンターが開館する。1977年に旧近衛師団司令部庁舎を改修して工芸館が開館し、3館体制となった。本稿でいう本館とは、現在北の丸公園にある東近美を意味する。

18) 278(1986年)、294(1988年)、300(1989年)の3展覧会。1987、91、92、96年の4年間は本館全館規模での常設展示「近代日本の美術」の開催はないが、1990、93～95、97、98年に開催されたものは展覧会番号をもたない。

19) このほか展覧会番号をもたない写真、デザイン部門のコレクション展も、フィルムセンター展示室で開催された。一方、フィルムセンター企画による展覧会はここでいう展覧会番号とは異なる、独自の展示企画番号で管理される。

20) 48(1958年)、83～91(1961年度)、382(2000年)、387(2001年)。

21) 工芸館図書閲覧室では、工芸館が企画した展覧会カタログを開架資料とする。

22) 註16参照。

23) タイトルは『国立近代美術館年報』(1952～1966年度)、『東京国立近代美術館年報』(1967～1999年度)、『独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館年報』(2000～2007年度)、『独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館活動報告』(2008年度～)と変遷する。ここでは、(　)内には刊行年ではなく、そこに収録される対象年度を示した。通例1年分を1冊に収め、現在では年度終了後、その翌年度に『活動報告』が刊行されている。これら年報類もすべてアートライブラリでは、閲覧室に配架される。

24) 37(1956年)、268(1985年)。『現代の眼』363号は、268「新収蔵品展:昭和58・59年度」の出品目録をもっぱら掲載している。

25）85（1961年）、194（1975年）。これらは他館に収蔵されるカタログを捜索、現存していることを確認することができた。現在ではその複製物をアートライブラリに収める。

26）10（1954年）、19b（1955年）、65（1959年）、70b、73（1960年）、78b、80b、81（1961年）、96b（1962年）、99、101、102b、104b、106b（1963年）、114b、117b（1964年）、121b（1965年）。

27）例えば、25「現代日本の書・墨の芸術：ヨーロッパ巡回展覧作品　国内展示会」（1955年）での豊道春海、尾上柴舟、また59「第5回サンパウロ・ビエンナーレ展：日本側出品」（1959年）での猪熊弦一郎、川端実、菅井汲など。

28）註6参照。

29）公開状況の詳細は同ウェブサイトの「履歴」を参照。
http://search.artmuseums.go.jp/rireki.html

30）主に利用した参考図書は以下の通り。
室伏哲郎『版画事典』東京書籍, 1985, 1003p.
『新潮世界美術辞典』新潮社, 1985, 1647, 149p.
河北倫明監修『近代日本美術事典』講談社, 1989, 414p.
恵光院白編『美術家索引　日本・東洋篇』日外アソシエーツ, 1991, 945p.
原田平作, 島田康寛, 上薗四郎編『国画創作協会の全貌』光村推古書院, 1996, 430p.
『デザイナー人名事典』日外アソシエーツ, 1996, 614p.
岩瀬行雄, 油井一人編『20世紀物故洋画家事典』AA叢書5, 美術年鑑社, 1997, 334p.
室伏哲郎編著『事典プリンツ21』プリンツ21, 1997, 1005p.
油井一人編『20世紀物故日本画家事典』AA叢書6, 美術年鑑社, 1998, 445p.
東京都写真美術館執筆・監修『日本写真家事典』東京都写真美術館叢書, 淡交社, 2000, 363p.
上田正昭, 西澤潤一, 平山郁夫, 三浦朱門監修, 講談社出版研究所企画編集『講談社日本人名大辞典』2001, 2刷, 2238p.
矢部良明編集代表『角川日本陶磁大辞典』角川書店, 2002, 1484, 86p.
まんがseek, 日外アソシエーツ編集部編『漫画家人名事典』日外アソシエーツ, 2003, 482p.
東京都写真美術館監修『現代写真人名事典』日外アソシエーツ, 2005, 593p.
東京都写真美術館監修『日本の写真家―近代写真史を彩った人と伝記・作品集目録』日外アソシエーツ, 2005, 483p.
藤森耕英構成・執筆, 篠原美智子, 秋島彰子編『日本美術家事典』2005年度版, 日本美術家事典社, 2005, 775p.
『古今の名工2000人』美術家人名事典　工芸篇, 日外アソシエーツ, 2010, 451p.
『美術界データブック』美術の窓の年鑑　2011, 生活の友社, 2011, 671p.
Bower, James M. project manager, Murtha Baca, senior editor. Union List of Artist Names. G. K. Hall & Co., vol. 1-4, 1994.

31）「東京国立近代美術館アートライブラリ　作家ファイル・作家シート検索」では、作家シートの有無と、作家シートにどういった記事がスクラップされているかを検索できる。http://www.momat.go.jp/art-library/AFS/afs_menu.html

32）註11、12の通り、『60年史』附録として刊行された「作家総索引」のPDF版は、東近美のホームページで公開されている。

33）黒田清輝展（1954年）、生誕120年 小野竹喬展（2010年）。

34）安井曾太郎記念会編『安井賞展40年史』安井曾太郎記念会, 1999, 561p.

35）註6参照。

36）註31参照。

37）註7参照。

38）註30参照。

39）註31参照。

Forming Media Links through *60 Years of the National Museum of Modern Art, Tokyo 1952-2012*: The Third Article on a New Attempt to Create a Single-volume Reference Book on the Museum's History, Focusing on Editing, Publishing, and Making Public a Comprehensive Index of Exhibited Artists

Mizutani Takeshi, Watanabe Miki, and Fuse Tamaki

In January 2002, the National Museum of Modern Art, Tokyo established its own art library to the public as part of a large-scale renovation project. That year also marked the museum's 50th anniversary, and there were plans to publish a chronicle of the museum's history, but the idea ultimately had to be abandoned due to the fact that it overlapped with the renovation project.

As a result, the museum's 60th anniversary, set for 2012, became inextricably linked with a plan to edit and publish a chronicle called *60 Years of the National Museum of Modern Art, Tokyo 1952-2012*, and a project to carefully review the function of the library. For a period of ten years, from 2002 to 2012, an attempt was made to turn the library into a "reference book" on the history of the museum.

During this period, information on three aspects of the museum was prepared and made available to the public: 1) data on the museum collection; 2) data on the books in the library; and 3) data on exhibitions held at the museum (including bibliographical information on exhibition catalogues). To expand on exhibition-related information in *60 Years of the National Museum of Modern Art, Tokyo 1952-2012*, an index was created to identify the names of the artists in each exhibition. This made it possible to ascertain a sequence of information beginning with an artist's name, the exhibition he or she participated in, the corresponding exhibition catalogue, and finally, the work (s) shown in the exhibition. With information on a total of 8,564 artists, the index was included in two forms (one arranged according to the Japanese syllabary and one arranged in alphabetical order) as a PDF file in the CD-ROM that accompanied the book. In addition, the information was published in PDF files on the museum's website.

Moreover, following the publication of the book, the data contained in the PDF file was carefully reviewed and revised, and made public in a searchable form on the museum's website, which now also serves as a database. In addition, the website is continuously and sequentially updated with information on the artists and works that have appeared in exhibitions since 2012. Thus, *60 Years of the National Museum of Modern Art, Tokyo 1952-2012* came to function as a single-volume reference book of the museum's history. By shifting information from the physical book and packaged media such as CD-ROMs to PDF files that are uploaded to the website, and allowing the public to access it by means of a search engine, we have set out to form a link with network media by creating a mechanism that preserves fundamental information that is likely to be published in future records of the museum's history.

(Translated by Christopher Stephens)